

「質問紙を的確な測定道具にするために」

今回は、実証的な論文によく使われる「質問紙法」で、方法論として気になっていることを書きます。

最近の研究論文では、尺度集の書籍を始めとして、既成の尺度を使う方が多いですが、基本に立ち返って、「回答者にとって考えやすく、答えやすいか」という目で見てみると、疑問を感じる質問項目も散見されます。まずは基本的な語法についてです。「曖昧・多義的な表現は使わない」、「文末に否定表現は使わない」、「明らかに価値的な表現は避ける」、「二重質問にならないようにする」という約束事を私は大切にしますが、既存の尺度は必ずしもそうなっていません。実際に回答がどの程度歪められるか、ということについて証拠をもっているわけではありませんが、何よりも回答者を悩ませたり、答えにくいと思わせたりすることは、調査を依頼する側の誠意としてあってはならないと考えています。また、人によって受け取り方が異なる意味内容の質問項目になってしまうと、回答の平均や標準偏差などの諸指標が意味することは曖昧になります。さらには、回答者の国語的読解力をあなどらずに、言葉遣いや質問内容に配慮しなければいけません。例えば尺度集に載っているある尺度の質問項目ですが、小学生も回答者に想定したもののなかに、次のようなものがあります。「先生が、おもしろいと言った問題でも、成績に関係なければ、友だちみんなが解いていても、自分はいっしょになって解く気持ちになれません」。測定したいことを厳密に条件設定をしようという心遣いはわかりますが、一読しただけで、答えられるでしょうか（ちなみに、この尺度の妥当性は「報告されていない」とありました）。

次に、「訊かれて答えられることを尋ねているか」を私はよく気にします。人の内観（自分の心を省みて報告すること）には限界があります。いくら考えてと言われても、正確な内観報告は難しいと感じる題材はいくらでもあります。そもそも「人の内観はあてにならない」ということは心理学の常識にすらなっています。また「日頃、そんなこと考えたことがない」、または「意図的ではない行動の理由」を尋ねても、その回答はどれだけあてになるのでしょうか？ 端的に言うと「あなたはなぜウサギを飼わないのか？」と尋ねられても、多くの人はその理由を答えられないか、あるいはデータとしては使えない答え（例えば「飼いたいと思わなかったから」）しかしないでしょう。もちろん、一定のね

らいがあつて「その場で初めて考えて答えてもらうから意味がある」場合もありますが、そうでなければ、「この尺度で尋ねたいことは、どれだけ回答者にとって日常的なのか、内観可能なのか」を踏まえて、研究を構想したいものです。怖いのは、たとえ無理なことを訊いても、評定法や選択法では、回答は返ってきます。問題はその回答がどれだけあてになるか、なのですが、それは書かれたものだけからはわかりません。

また、5段階評定でいえば「3」、すなわち中間段階の評定を安易につけさせないという工夫も必要だと考えています。評定「3」には「どちらともいえない」という評語がついていることが多いと思いますが、これは決して「考えたけれどわからない」「質問項目の意味がよくわからない」ときに選ぶ答ではありません。評定「3」は、回答者の測定したい行動や思考を評価するときに「3点を与える」ことですから、「わからない」という人に3点も与えてしまったら測定はブレてしまいます。なので、結局は「わからない」と思わせない、わかりやすい・答えやすい質問項目にしよう、という提案になります。

そのことと関わりますが、質問紙に回答させる場合には、こちらが尋ねたいことを考えさせやすくなるように、回答者の意識を向けることが必要です。投稿されてきた論文を見ても、教示文が書かれていないことがありますし、また実際の尺度でも「次のそれぞれのことは、あなたにどの程度あてはまりますか」という汎用的なものを見かけます。これを例えば、「みなさんが卒業後の進路を考えるときに、知りたいけれどよくわからないという悩みに行き当たることがあると思います。次のそれぞれのことについて、あなたはどのくらい“よくわからなくて困る”という経験をもっていますか。」などと、回答者の思考を「地ならし」（心理学のタームでいえば「プライミング」）できる教示文に変えたらどうでしょうか。回答者の回答に向き合う積極性や思考の具体性を高めることができ、また回答の状況を統制することもできて、結果的に安易に「3」をつけさせないことにつながるのではないかと思います。

質問紙は、できたものを見ると誰でも作れそうに思えますが、厳密にあれこれ配慮して作成すると、けっこうな時間がかかります。測定の厳密さを高めるためだけでなく、一人一人の回答者がそれなりの時間を提供してくれることに応えるためにも、丁寧な仕事をしたいものです。

(滋賀大学 若松養亮)